



時代
模画

俳家奇人談

中



仙家奇人法書中

竹窓玄玄一送稿 男蓬屋主書 参訂

松尾桃青

案ずるに俗名墓七宿辰七宿忠右衛門等此武院阿乃
今言雖山頼房法の三玄修示後く忠右衛門と云ふに

松尾忠右衛門ハ伊賀上陸版家何某此近江より一年有
里テ板口を立いで活字より吟叟又遊學するも七年寛
文の末つゝ東武に下里礪川の氷屋修成傭夫とありて功
我修家の比難藝一風羅材といふ流川又店を結ぶ
つゝ色藝を拙く楽しむ色より世に舉ぐも藝藝店と
稱し修松葉堂名店兼虫店初此名を宗房といへり後桃青と
改む又杖錢子色佛材等名諸号あり素より學識宏博
氣象飄逸古今小書人素記所収あり里因縁名我仏頂老
師より法を授け河内六丁坊より當時その種は改依



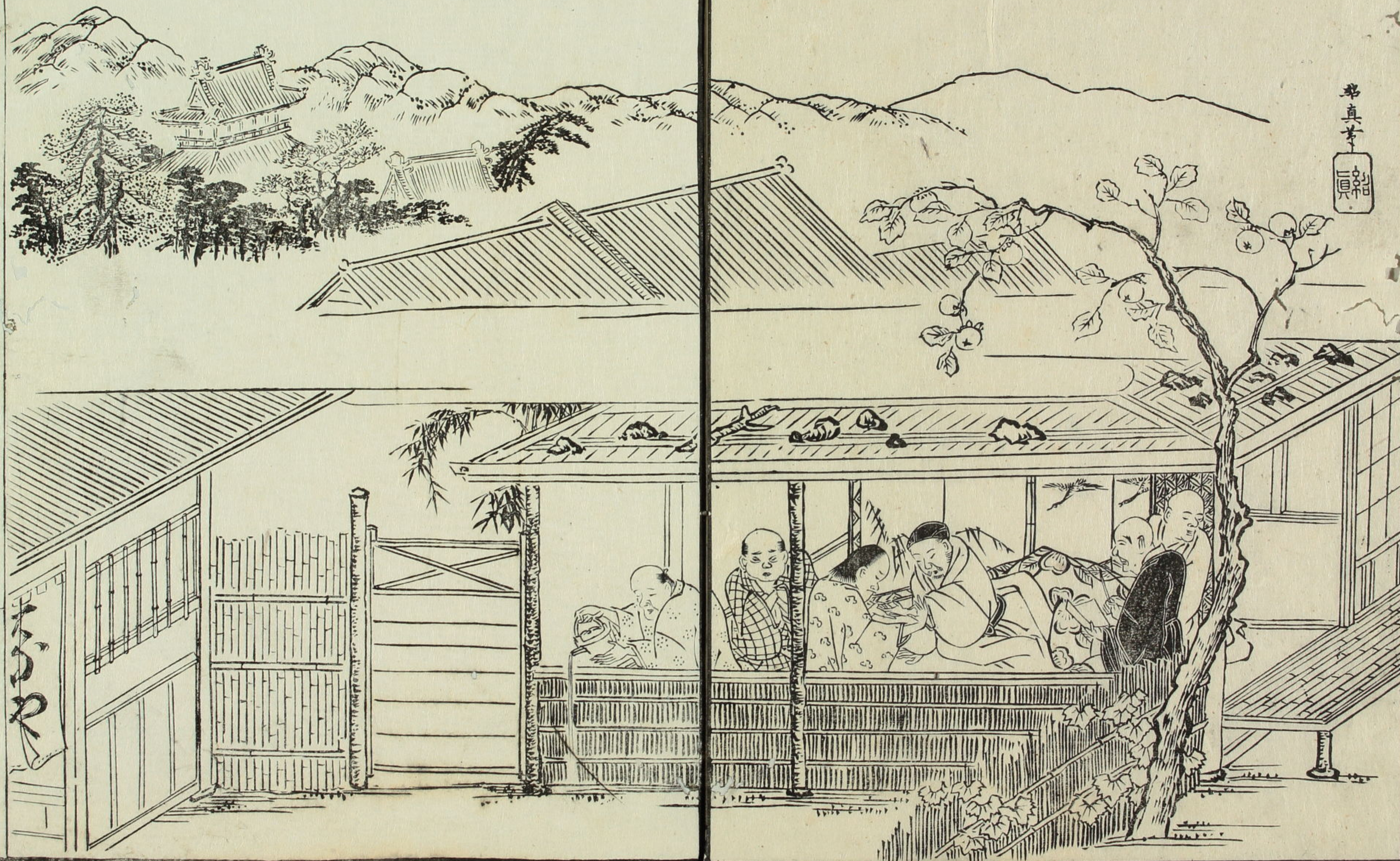
昔者鳥醉藏此物也久矣後授之於白河鳥黑
鳥黑深秘而不置云往年予遊于奥羽而道經
其地竊得就鄉人而摹之今茲縮圖以補夢太氏
蕉翁真之脫漏而已 儀伴閑人



す家人也一とせ何の年ふり有けん石山此奥に
て始く幻位高忠幽深我楽む久享に年秋鹿嶋
何里同く又年松玉を携て大和に遊びえ歸二年
を率く陸奥に移り同七年の秋に病作暫く在り
振もあまたなる病中をうけく赴んとて支考
侍は歩成進く風托する此日病を患て大坂に
移るが後至小休に病中の吟一極く屋んで
はつる風流の強なり後七目成るく致に
有一啼呼悲ひうあ此更をこたひ江左に
自強の妙を記し遊り一能惜をく
光あ人我蔽は後代に留るを句西愛一
後進させずを平くた家考我名く以て三昧を

華真筆

眞



本蔵ほんざう一いち天下てんか後世こうせいまづいいくく船ふね中興ちゅうきゅうの太祖たいそと稱いふ譽うたせらるるも
 宣のたま方は依よるるあ押おすす北きた邊へん是こゝ度どは海うみ切きなな依よ藤ふじ云いふバ佛ぶつ祀しのの新あらた我われ伐き伐き里り
 水みづまま荷おひひ千せん幸しあは第だい苦く一いち大だい氣きににのの名な生せい成じやう海かい度どするるうう
 答こたへととやいいちちんん去き小せう學がく尚なほすすべべ一いち支し考こうがが存ぞん糸いと秒びやういいささうう
 子こ細こああれれがが様やうととせせらられれ

樓本其南

校中^{の母才}空角と竹中東睦が子あり未と源助と里一附の神田
 於玉^{おたま}が池又^{ちう}恒より儒成宮の秋先生小^{すぶ}学び医を學べ何某は
 戎大體和尙虫を佐玄龍画戎葉一^{つと}端小僧よりて多能あり何の
 によりう意つまのくそ冠首より晋其角ハ易经の文よりて室
 晋安と米希^{すけ}が祝^{すけ}又^{せん}瀧する此字あり一名堀倉晋子師と雷
 櫃子^{くわい}河川とも画名菓子といへ里狂雷堂狂而^{まき}崇六^{まき}病庵義哉^{せんさい}店
 文合^{ぶんくわ}店^{てん}皆此諸号ありを性^{せい}よりや校^{がう}迄よりて人より拘^{くわう}らば

酒を飲ぐに礎とて我乃成るなり或日ふふ付文
 此會延ふ仍合をんぐ管心ける我爾生傍る小碑并一仰き
 居より云々一妙句にありに記何ぐ里くいふ仰見銀河底と市と
 冠里公室中此會ふ金掛ありて銀掛多に如何と戯言ふとぞ
 答々金玉何つと銀玉ふきぐぬと生即智大器出の類なり
 又享中照降町に居我福す破笠に記し嵐高とたふ回居せり
 と載るも此法なり或才より一巻の息を巻に収めきん得く
 返して回く此巻何より小初んなり我附巻我著するに収めば
 連中の方巻又復すべしと彼巻能く巻を交えり振点料も
 返してんやとの答々料は又償又収並ふ里と返せしりもいと
 在り今附人その徳をたぐし其力もふくて四より古人の酒
 落し振一風種我驚し平乙を立ると同日の復ふんや昔

日や船院どの「歌れいろ」思まれくおくらある人々の塊おれ
正変をほさるもの「文をほさる様は」おす様うふ眼前風振
人ひく云ふ「能はず」云雨や家哉同く鴨なく後集又うぬ
「夕涼よくも男み生れりる雄叔倫を」「稲妻や時めいふふ
西乙園が澤の什色は出るに似たり」声うれて猿け齒か一掌の
月或彈すく今令少子後更於詩何減葉王と海宋「意盛
子て歩る」又婦の系「名月や夢れり人小松の影」冬来てと
鹿響ふはる鳥り奈生縦横句在る月夜「又能階の松蔭
翁と少子也一朝不可論尽きう協を後人あるひと思へらく晋子
調異師翁と殊不知離而合者なり蓋一支考許六の梨葉儀隔
多く空作思を焦一奇哉索むといへども意存れ條陽晋子
が自放ちるに及ばざるや遠一

服部嵐雪 附烈女

振袖嵐雪の泣別小振並村小お生に幼名久る助或ある湯馬天後
久米助を此邊のりてあり長里て東武とお杉店隈おみけくお河
又井上おお公も勅さる一そはは産多おといひり一年君
候の候一て我第お振里井の端おきく足瀧人とするに卒
官く起雲り雲の降来る成尺く「武士此足で米とぐ雲う赤
越生にすさみ一う赤より赤成籍れ本お抱く山色を赤まん
とす赤志一止ぐ一我社をうて一居宅を退の日常海衣類
稚雲等よいとる一赤も手に携へて其後れ一赤唯一
風雲と赤小赤ひ出いつ一う蕉つ一振ぐ能名を治助といふ後
嵐雪といへるの嵐れ屋の官をうて一と思ひ寄ける赤さ今更
改んもおかほ一と笑める度くなり妻れ名を列といへる

正嬌り之雲のくもも横の秋

浅

女考九句

鸛十六屯廿

其角

半面美人

沉香亭裡

白居

妾の心

本より小徳あるものも横の秋

半面美人

心ナハつた

百花嬌語

翠蓋

墜玉簪

探荷

弄晚涼

探菖

心

九

心

心

福白

大正
 九年
 九月
 廿二日

A large, stylized calligraphic signature in black ink, likely reading 'J. H. P.' or similar, with decorative flourishes. The signature is written in a cursive, flowing style with thick, dark strokes. It is positioned in the lower right quadrant of the page, below the main body of text. The background is a light, aged paper with some faint, wavy lines and a small dark spot near the top center.

20
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524

2
 1870
 1870
 1870

Handwritten signature or name in cursive script.

嵐雪れ切なりと祇寂り文に記さる初り、其後唐室を慕ふ
此種河王後、雪中庵つふ不白斬玄峯雲と号せし、禪師
雪千山を埋む、什麼孤峯不白ふるといふ、清くよめること常
に漱雪才丈へ参す、昇る、移り、移り、才丈へ申し入る、時
沙同て云く玄春望別送乙片、詠今秋归来相見了也、即今如何是
行脚眼と答て云く、觀音境裡古案樹、沙いはく案無古今色作麼
生無古今色、的一句割進、云く春色無高下、花枝自短長、沙は
を領して休玄と号稱して、冬案、或返記玄、師と安り、可笑し、死
後阿り、玄案唐猶を案する、子法、よる、り、割進て、それ、點、或
案す、案、も、移、る、る、人、百に増す、る、案、物、物、い、む、き、目
い、も、生、看、或、喰、す、師、案、と、云、く、は、い、と、思、て、も、此、を、改、め、り、
或、目、書、此、他、移、或、幸、ひ、移、り、猫、を、を、す、人、を、り、り、日、書、又、改、り

束く、案、案、る、此、移、才、を、知、ら、ば、と、答、ふ、妻、泣、叫、く、悲、慕、
は、と、切、なり、「猫の妻いりある君、此、奪、ひ、り、こ、こ、ち、つ、ん、地、
悪く、方、里、ぬ、隣、女、を、り、小、生、作、或、告、く、猫、の、移、先、を、清、る、
案、大、り、恨、く、又、或、報、い、ど、み、争、ふ、つ、人、打、或、泣、さ、せ、て、或、
公、或、和、と、里、こ、り、や、睦、月、は、ト、免、の、或、或、い、り、ひ、を、人、く、又、
案、れ、て、と、踏、出、し、と、「恨、ぶ、或、又、よ、や、を、月、或、此、玉、を、或、と、ハ、此、
時、或、る、り、小、と、有、り、日、ト、せ、重、陽、の、詠、り、「其、案、公、菊、の、
お、此、名、い、ふ、く、も、り、友、晋、子、深、く、感、ド、て、我、生、涯、案、此、句、是、
及、ち、此、と、生、り、己、又、案、此、案、或、小、若、阿、案、バ、沙、の、公、案、や、
此、詠、と、此、句、あり、お、を、清、る、里、ト、こ、あり、生、或、作、老、或、沙、の、
案、中、小、置、く、も、亦、何、と、分、ん、や、「元、月、や、睦、て、夜、の、物、く、り、里、
不、言、祝、賀、還、在、其、中、「蒲、團、着、く、寐、く、る、次、女、や、東、山、壁、言、喻、の、

句難一此什温厚和平實小平安の素な依り家「君不や家
多いると量れ桶足見其莫逆」世估一亦能身へ瘦又けり作
王獨活「世は風うろく來て吹き流れ泡」竹の子や思は園公
起の美花「梅一輪一まん程の暖うは」沢深のふりりるる暑
う家「初秋はん動きぬ縄すぐれ皆以く足見其正風と真曉
年山竹井戸小宅を求く久く恒せり時一室永四年十月
双に葉又十有四輝世一禁ち依咄一禁ちる風北上りて用
所の忌中いつ人園竹は授け園竹是哉吏登又傳は後世あの下
風う浴する若東越人多一主徳すこ大ふりばや

向井玄東

向井平次宛へ前の廻抄け人幼あり思ふ後く洛陽は居
性年蕙門ふのく玄東と能名すそ風格雪中と並そそ先

事ふ屋一蓋一當時英以羽の魁あり一尊形山ゆと茂く
小松久と下「動も不えで細く月男うか」神叶に來ぬ家
れを擁ちり「玉柳の奥奈つ」や秋の歌「尾張の公えお能
海蔵うか」荒波や走り馴る友なる海蔵死して後抄哉
作く以て生流ゆ便り生性其深切なる皆人の知る所なり
其舎を居材と名く「句絶風俗」其舎を鑄書して因く
一我家北能活に遊ぶ屋一世の理屈をいふくくは
一物々しく精を我思ふ一魚を我思ふはあふは
一迷う「所吹をすい屋」細草を嫌ふふる何ぞす
一隣に居居哉はべ一火に用んる一はあ良は
いと風流うて可笑一支考が後々記より玄東の煙管哉
掃除するの癖あり又此をせよ隣に居居といふるあり

是より此屋敷に此年といへる老婦が食する我送るの意
里に時より室永元年九月外に産根の許六の孫を作
曰く暇ありし一財より清く居す弓矢我控て十五歳と終
たのひ十五歳先此は合く三十年末大居士何のほより
先少藤藤又思く風種此名ふ言ふり京少みかありて諸
子の既より産す南あき衆を押く東北此風我獲す器
此時正風作の眼を形此湖此水より里より五月雨よりや猿蓑
の櫻を蒙く不易流の巻我分ち後核の彩風は陰でも終
幽玄若細みと忘まに一本枯の地より居はぬ時あり赤子祝
や雲雀の十文字より申りり又何水の仲秋よりや「雲端や霞
いも獨り月此客に添て先少此年を驚りし月賞殿の才一
古の飛送にい極里たり終く一代の飛送を一友句持る人

けく稀あゆむ一此を此とい改く一叙句に及べり二十餘年
彩水の功つり室暖味若落材舎より沙をむく人石山の幻燈
唐より考を付ふんざり深くををを雅波の愛我まで佳
體を解た義仲奇此藝より肩衣小脚淋を携ふ外後の
陣我堅く守里諸生我ちつけ初人を投く越の浪伝
習く有波磯波の虫を選り一隣此卯七我助く渡るを集
むけ我大我より力我よせく文選序者れ一人進み病
床小却てと三夜旬化の虫を家より何ある蕉つ滅亡者
月月よりや何里りん去年のあり申越の院家夢ト玉ひぬ
今年我文若文若年す秋九月この郎去く夕も此是と
ぎ此思ひをけせく人若我我るるや下果又支考り活
材先生の機奇何り終る一暗に

借文草

借文草とは先代々尾陽大山の寺にあり幼より学成好む倭
漢を究む好むなり其母は孝人なり才とけり其母は
はあやゆつりくそを慰む嘗て右の指小痴つけ刀此柄持て種
しと酒り壯年武成禱しと種を定より其時の口號多年肩屋
一過牛化做跼踰得自由火宅最惶涎沫不偶尋法雨入林丘白山涼風
きゆる我雲れあやうふふ法華経を誦するより他する
しとつふ何事以てや門下遊んぐ時く其我得ふす「我もこ
流彌北遊」拓芳うふ「啄木やや拓木伐採はるる中」醒靈
も少く仮此世の極楽なり「有明」振向ぐ「此室うふ」美
きく「衆の衆もちり重り」随言句をその作む可なり室永
元年二月に十二歳して此世我を去る人玄来係我作く

曰く今茲如月来れ旧日月の村庵に殘る物も種少なり
里ぬと湖南の正秀が許より知れ生り日み種ふはり里洞
止欠り種ぬ津久ぐそけ人なむし「我思ふは尾張の西
生れ不山候に仕く」勇猛其名も有し「こりや一日の意
一人を信し「竊」君父の家我思ひ出送の傍ふ慰ねし
きり雲滯り引替らねる中黒洛忠史邦又より里五兩亭
に仮宿し「先代々見く種らねし」より二尊れ故郷の中
小石をわし「並くは百の公傳のよと面我はし」向て吟念ね
母く此人を鉢に先代々云ふけ借是道に進み学ば
人よりよき人なり月我誠なりとけりそあ人りす下地
の種たるなり美むし「種も性善み学ぶる我は其まに
感有りて吟し人あやう種す為とけるあ意とるなり如



仙家奇人談
卷之中
十五

斜あぐに文りすく小雷鳴地より吹風靡をはあちけ
れに虚室欲穿閑是宝満山雷雨震寒更と興におられ笑ひ
照してあまぬ身なりと我鳴くくはうふと笑えー雷衆れを
と再び移るぐり今むちうた名なり残里より十年の笑
ひ三年に暇ふにーと悟るる年を然るを望す惜ても程名
をく此一句成手向く来くと以て成法に傳るなりとふに
名きく喜や三年の生ゆれ

森川許六

森川許六とは江戸産城北士一名面仲字羽菅師と云ふ阿松と自稱
す吾れ五老并と号にふき井小四條あり一草字藤程に二
小揚揮豆あり云々雲花雲四紫芝同許六の風雅の嫺ぬ
るなり草田が文と知るる人と成り敏達くく能くする小長ざり

又画成能す蕉翁も画と云く沙と云く一能勝ハ安と才子と
云はにと出けり生殺句すと興せり一本和と成るに桐かん若
芽うか今々限の喜れは情や帆くけ船一口八月のわ波さ浪や子
規一竿と死装束や古用平一着絶たるを招致哀盛り哉一欄
杆小堂るや葉れ乾法沙初霜や清承江戸名人公「嫁入のつ
と」より許六は沙翁歟後と云送愛の楓樹を伐く尙像残
刻み是成大津の替月尼く一掃る生又ふいそく

此所教を其持ちあはせりこれー目お交存の拙者といすと
す能と云けたに像も皮延引け皮翁も手小ぬれら且ふ
き井此古本とて刻みすひらせり兼て大方も像刻と皮金
ヲダてても初集あくけむぐくく和又和集の中ふ候
十月三日 霜の後像く流るる葉もあー 許六

智月尼供

生恩遇の海を忘まざる事初これ惜むる家晩年癩瘡
重くして人小面する事適道我言んと召取来る人何
でも屏風を去れとて遠く成作は一年金珠の菓子い
し月て對面せん事成れむといて屏風成作んやと病床
近く飲酒めねよとる教刻磨け居る奥氣苦くたり
子ちくきて碑破ちく破りて後全舎るは是バ病あり
事す恐る事小隠も一皮剥きお見えと露も懐き
風雅な程の大夫方なりと何人評し合はると西使又
小死に後爲の偶り一時打破屎糞壺芬々臭氣供梵天下
死ぬる事と思ひし上も死ぬる屎上より此子終身
已まが成代句讀して代を皆蕩却と思ひたりなり平生の
後中一丁を記し入るの我れみ方里に富ぶまり初老後
まで膚摸お目逃うらるゝ能家此一奇物と稱すべし

東谷村支考

支考を為流お人はいく多様事あり
冠の冠なり吹毛羽也春三月影揚牡丹花下風といつる傷我作て
字つれ言信り来れも安れもする東谷武寺の大舎小碧巖
溝よりハケ條の荆棘我祖因にあり法着生身を好み遠く
襪機を控きたるや嘗て勢陽山田より身成匿るが何と
風家に親み交る時より流着るの才成惜む能信を勤く舊つ
へむ功成く改口するといふ見龍といふ緊又隠る此名白狂蓮
二と改め改る事して及るなる事三條の畠小なる武
を林谷松名稱あり坊号成東華西華と唱るは方道通

夏ふゆつゝ居るり蟾蜍「る」呵る声と松野の嵐うか或年「
深川菖菖唐れは生けゆく」菖菖小沼河らひ「河やはれ後
そは回鞠首我氏市日若君寵をばてより上下壅塞して
ゆらげらるるも重王唐中多くも此がぬ」若めら
る計つて我が家へすうー入息悲復我責く殺害しそ身
公まがりふ句殺してがり風林れ名を知るれども忠誠の志ハ限
れとり生事破談ハ和帝銭能一且菖菖菖の名手なり破談再
照といふ句を多く菖菖菖れ名小附くも欠播名名も黙してあり
修「季」人又その修父幻位を人れ閑寂を樂み「る」菖菖菖
れは「る」全雅ちる夏我知る菖菖菖る此の如く名家と稱
一川だ

惟純材

惟純材ハ清河人素豪有を王「る」も後志と名大「嘗
て」蘇門ハ遠達して惟純の狂若と呼ば風雅を公をさる風雅して
器に生涯破生菖菖菖小風雨我凌ぐ性く此の吟あり
「水多やむふれ若くはういつい」本ぞや若若松風雲の
ぞや「唐山のはあむをさく」小妻うさ「時あけり走入りり
晴ふりり途中菖菖菖をさるる件六に此の我あく回く吾
子題す「一」件六は水我強「唐山れ句をさる」て
天狗集と名け「る」其後の夏な里り菖菖菖「あえ」る句
「名と利との二川三つあり」本菖菖「梅の如河うい」あいに
あふみの生枝遠慮あり「る」屋「一年西玉の如の時梅
唐あけり」小妻「る」あえ「る」さるより狂若れ留ひ
菖菖菖「る」肩我綴「る」草菖をさる「る」菖菖の至を

元里秋氣零落此言我速多倍なり初め解出此柳陰朝う旅
痛のる我休くいと賤くくらひ「ある柳阿る」ト我も陸を
ちご派ドてま出らる一年元がに号「最暖」度の候よりなり
「折角」を解く「ぐせよ月此雨又或時」梅が香やか入る里を牛乳角
といつる名句も阿る

秋之材 附 李東

秋の坊も金珠の名言は風流名隠士なり「凍つ」此を凍つきふぐ
盤此風をといつる香派もある「或時」妙子湖南の如く度う「材
いさ」小沙翁の「我高々」故高小を記を馳走うかこて一夜二夜の
飯席を許けき「ぐ材」も適世れ身あればとて芝居「連」の
い「鑑」物屋「麓」はで「送り」居て死ぬ氣色ハ「足」は
此声と「勺」の「煮」海に立おきぬ「飯」をく「交」連の中にも「校

解「時」あり「ぐ何」物「流」その「事」あり「ぐ始」中「阿」
「足」より「解」此「解」の「足」度「すぬ」校「等」も「面」阿「る」
此中「これ」を「此」人「手」は「りり」も「若」に「を」坊「お」一「解」の「寓」
「満」り「く」強「日」強「士」と「合」合「すれ」も「如」校「と」云「す」は「満」で「懐」
氣色も「余」り「里」一「牌」強「も」氣「色」なり「と」感「一」け「余」も「り
又「余」より「強」の「流」度「解」本「末」事「も」ふ「三」衣「一」件「あ」
「余」氣「流」度「解」度「一」固「く」子「れ」解「く」度「を」乞「う」一「言」け
れ「巴」より「下」我「解」ぶ「了」物「打」荷「ふ」人「を」恋「き」子「あ」「一」
け「巴」より「下」我「解」ぶ「了」物「打」荷「ふ」人「を」恋「き」子「あ」「一」
我「解」里「越」く「も」嘗「て」い「ふ」風「人」を「宴」う「清」客「も」な「一」死「後」
米「流」ち「多」く「残」り「ハ」人「の」め「も」「一」申「一」ける「を」終「焉」
月「日」なり「兩」友「李」東「材」以「来」里「強」白「物」屋「も」り「足」此「如」材「因」

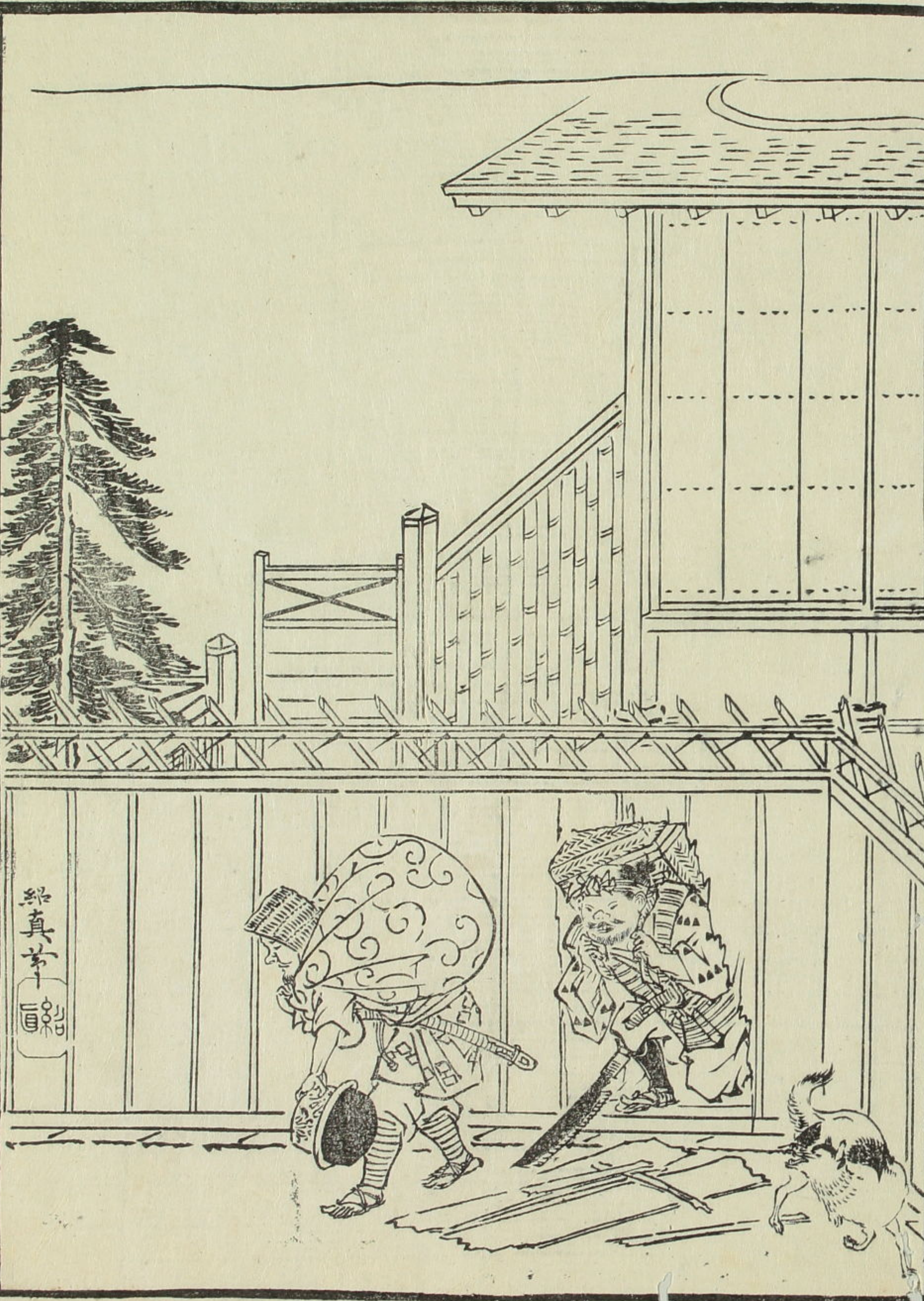
我曆作まりまはるゝとて「正月宵よりけし我をふりけすき
むらとて」うらうらむいゝ息あえり李東鑑をたふし
平生句已を忘るゝとて「あがき」と感涙をほせたり「稻
つむとてせき失り秋の村とて」我を向くかこれぬき舞する
とや

李東鑑金樽めく十村を舞ふに及ぶに「能得此舞等
れ高尚の舞を舞するうみ人々も官を俗物とせといふが如く上
みそ月人のふ風流よりれけり」官人々「忘れり舞ふは
冠を掛きて」宿も寝がきり舞の着と言ふふ吟じて出
ぬ舞し心中堅固の舞人といふべし

磨工北校

北校を金樽を磨工「〜」校をがやちり舞するの能や我感

北校の達士と称し「夕風より何吹けけ」舞月「大月」や暮
我ある「一」様を「来る秋の風はうまで」とあり「竹素
酒ふ習ふや露時雨を北作を嵐北室」も入る「初
生友ぬ柳新成ふらぐ」酒を嚙く校素より嗜むあり
目よとにけり「阮籍が壺中」甫富れ風流を呈「たり目
く夜くの変りれた柳もすま」ハ倦るる氣色をればけ
後「云々」は足り校もす「中」は比ふるが校
とけ下めり「種味」やありとるに下めり酒れり
合点「て是なり」と答ふ校いそぐ「是なり」は一杯けむ
柳後をけ「へ」大第「強」酒極度「け」け
其時校は号「復酒や我と乗あひ」火の車或夜校が家
能得有り三更の比偷思入り知り人ありと告ぐ校



紹真筆



お知く何れ孫持ぬと出だしと戯ひて居ぬ里よりあり
諸人みな静しとく生席を照さる時と「世万咄」ふ茶が
浦ちんくといふお向あより校を河へず「盗人の目お掛らる
えでたはよこそ附りえ流年間金城焼失此患何ぞく房
舎あふばる暇とを係校がぬも累火より夜より多く付
束家答へ「焼ぬりけまども急を救済して自若り
されど世更飛る河の底を能くつる日風土まよと時
人感一りと後婦とくび火災の連る不後吾人せき東王
むりこれ事情いふとと「流ともお祝と等もすみと成る烟
中ふ一句作廢生校あこく「流もに祝も等とすみとたり
生あこの事まうくおどち記する愛も滑稽ハ忘けるそや
此時「家兄舞といふ集お来より中より焼ぬりけれども

櫻けりぬち支考「梅が香やほ以一葉」煙火存牧童「雪
ひほも笠雪く雪れ小屋の屋根北校又雪消ぬ掛りく奇仙
「梅枝の祝後にあふす水鶴ふお校「雪下すれどお此急
時後「板敷る人の笠きて校窓く支考聊武庫の人は病床
「存皇目夜浦りりたる夜を皇とて校をやみもたけ付ひ
り紀湯粥の世話やでもぬたるる鬼角する中疾篤くて
治療術をうとて笑く文おゆりは吉が命終まると何そ
てく走王ゆ紀強家よへく金指代叩き後吾く我を捨てと
はより生流る大流ぬを流いぐりり梅了と妙種うち絶るハ
別「遠く縁より夜ありと初め小識「縁もあ合く感
た里よりやけまを平生此交王思ひ願うれくちり

僧浪化

僧浪化と東つ立一如大僧正の蓮校山て紙中并波端紙寄
 此位職あり一年慈養れ雅懐をささぐふく或夜をそり
 落材舎ふて裏面一少才の石室後汲む此を其角
 砥波山集りも此志の免でくそえぬを予と一くと思ひ
 ぬる中我給すと記せり生一坐れ夕成りめて必廟集と云
 一分入を鼻響れ声や雄上川「半」の鼻みもあて時ぬる系
 「妻侍や枕」持ふ出の口へえ深十六年壯業して夜に
 鳴呼をいふか

僧千那

律沙千那を江為要因本福寺の十二世一法名成明武上人
 との嘗くく月くく爾養材と号け生性穎悟敏達せり慈心
 此地禁と稱さく「連」のうとほるけや初接「持れく此」
 形や梅柳「言」灯籠をるハ物う能極く享條八年了寂は七十
 有三歳あり

小川破笠

小川平助ハ江戸の人性多能くて画と細工長せり能名宗
 字は「め」露言は後い後意門ハ連ふ業若く至一時の句に
 「妻ふもと我人わりの様持を身板傷くく」秋後ハ疎まれ亡
 命するも殺後或時本方れ山中ハ休はひ入里宿るづ死す
 ちく「跡」ハ倒れ「衣」ハ破れ「足」ハ行れ子望ま
 ぬふ里身と系堅一板板はとい食ふも饑た里くれハ「食」
 形とあられぬ按山子ふと吟して名成破笠と改く至とあり
 空より江戸帰く晋子ハ寄富「虚」集は食ふもの句は「和」
 するハ三年久しといふ後志ありて津輕あへる

食膳を以てより延享四年八十餘歳にて歿するなり

諸通

諸通と何れ所の人なるかと我知るに若くは一に叔父の何より
院より人なり小種より一我意近江の諸通は傍より物
いひふ常風流の流ぬ及ぶ幼なり好み一掃形をればとて二
此有我庭より出て菊の置に坐も候へば一工落とる浮世
を離る所をばいづれもそれ程よりは一掃形にて曰く我
まだ君家より一掃形の一掃形の素吟の奇想を叩き我意近江
院より小今八郎の傍のみより一掃形に坐し一掃形の傍に
小種より一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
らるる一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
年々當妙の諸通は傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に

此秋北の志より遠より何より一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
とも君後馬の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
画がみづより一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
陣の時此子大津の使者我意近江の諸通は傍より物
丹れ鬼要同んより一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
誤王より一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に

諸通より大坂より一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
年以より一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
西の諸通の諸通は傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
此人が傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
於て一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に
ありいより一掃形の傍に坐し一掃形の傍に坐し一掃形の傍に

二月十八日

曲水橋

おせ銭

損風尼

伴賀別上野々一損風尼といへるいふ河風妻が女一て因藤
安田氏へ嫁するといふ文ありて後難頼一能清を以て宋
に意門れよ手なりを妻縁と嘆え一の名母やりとれて
ほろも標ば一う生瀧中句銭撫く本禁集と名く屯又新れ
す惜むる一翁いよと意口小立く忠たつる一とき衣裾表
世治ふと交らまうとや後年深川の席へ使一て能清社
といふ物を指さし文意をたて置き標めを制せ一物殺あ
ひて右の肩に一寸さうまみどりた振あり東瀧子一を家一
に風流ありと歎奈一

智月尼 附乙別

智月尼を江州大津郡若人乙別が母なり親子とも風雅を
あはれん意縁銭沙と氏一年乙別が東行する銭送るとて
「わげとさ人尺ふゆく旅を不ニ此寄嵐茶を傳く」あきお
米おほ一けり稲すめ「きき」てもと手え屋す免世協一本
れで丁を命惜ちま様堂身れ老衰をうとちく「我形も衣
小尺ゆる旅世ふ智月」うま山の名南まのる雪吹くお「昼の
昼するれ夜まはるま乙お晩年此尼沙ふむり川く紙
筆銭備へ席子の袖り能合せく我一形尺と成屋き物出と
残一とくと金む翁臨死ちうも六十ふちうに尺小形尺
を乞まういと力ち一と戯れふぐち出て笑一ととるまを
沙の死期をあらうとめ計り知わうや浪堂よりその愛

ふー唯葉一付さうめー並りやねむけれぬ紫お禁々
んようきんごすべーと盗うふづねなる彼世うち海へ
松上り一葉席れぬは我ぬれおと踏出ー三我席の横
と寂ー隠里先とあるを忍つ事何のさうやと穿ふ坡
糸くれり一答ふた何るが今国事の存続も句作さへ
たやと被すあつち一恒溜る雀よりよく書れねと盗た
感しておひけり主人と成り扱ふるさ此の如ーを
後先沙の望名席を言津抄小稿ー句う言津抄の寂と
祢せり宝年壽我さうに

我智我人

我智我人々尾陽落城位す舊川の老牙なり「刃海目」なる
い屋ー夕ひみ一校名木の野里すねる若葉ふか「ささる」
撫磨らるる牡丹ふか「稗」の穂れさうたる糸色うさ一季
江戸ゆく金魚が句先才といふ出我著ーて我人が送別
れ句ー「我」の公座すはよ終業此意といつるに「我」時
は風と我まじけーの花と為ーうご此人の涙中々吸はる
沙羅も色を散ちる花玄ー江沙の砂拂は性ー信る約
何るー小何ー一被ふ花志と覚うりーや若紀女ふか入
きーるも有ー我著る花終里何らげるさ我憐々後の水
拂ふと金魚さうさ玉の何とさふ名味を成りー我後撫て
「落」思ひ切る時猫は意さうかさうり沙と此勝勝をや
よみーけん後の撰集は此句我は加へ何ーとと毎々君子の
懐む取られど又玉れ危るー底を記もうと被ーはまを世
端我叩く宝福を知りぬまを色ど世人の風流さうにや

叙及して後著漢の支考先沙の愛者滑稽皆れ傳ふて其言
を撰人其化松撰り多多くおいて古式を廢し世人を欺ける
とて大に怒り不猫館といふ處を著しと洋行し其館を
せり實に我屋に添切ある清潔の士とて此世のふりあるべ

涼菴

涼菴と號す山田小在位一と神宮あり蕉下小在位と云
と名號するは涼菴秋阿るひは神風録と号す一其れも意
を應えり今招きしを「淋げけく阿る小ありや秋菴涼菴を
號し難しあり」梅阿り後「梅あるが秋あり此句老成爲徳
」天竺此手小阿阿るるを「身の上紙只ま水なりめ意
を」世に送り送り人となし後「學履多しとて阿る
人よりと存ぬしむるに阿るとらずを」を阿の意より

直し思ふく活れ東山一ゆ紀生より梅阿涼菴の梅
く又うりくと終ふ長壽海でたうり阿一とて其意
を我々雅人と稱すべし老後危きふれよんぐつ人松上
にまき里辞を我々ふるを眼を阿りて「念ふやや阿る
きれ子親と云つて又操く」一と曉の意を阿るやと再
梅の意を阿る乙由りて「阿る小在」此語又「阿る」何のうと阿ひ
や阿るんを阿る此松字に「阿る」又「阿る」は「阿る」水争我
阿る時阿る小息を阿る里より一阿る一此を我阿る
病を患く死せりて「病中の吟」今阿るで八人が阿るむと
阿るひ一我阿る人阿るの仕合とて其阿るなるを阿る
阿てつ阿る阿る

百良

引良と信州後侍の聲ありつとせ東武と遊ぐ蕉つゝ入里
一時ふ名有り「ほのく」と鳥居むや密に妻「果なや」
孫山一垣百尺のはふふちふつと根亮ふ「大木互に及と河童の
市北は又按ずるに桑の細道より引良と後成屋みく伴歩園
長崎といふ所ふゆる里阿れは先づめて初と有く「ゆたかくて
たふき休とも秋草を又いそぐりもの」然み残るもの
暇み雙を虎のあて雲はほすふが如く「おれ河童は河童の
難情思ひ屋は屋」然る後成を此人北越の山中まで沙を
桑小遠し引列れちといふ「大なる誤なり」若縁集
毎城ふての吟も「たぐみ休て紅いほは汗拭と急るまで
そは志の程ちとほ

桑田守古

桑田氏能名守古和別郡山北重臣なり少ふより鋭悟人
超り「たふき休と」桑田守古と人相はあひに通るも或時人
打寄里村の野いづて銀句せよと沙村材の云「妙子進
中く「定づけ」の意の手拙や高き梅ち」先才廣く法にて
後變じそ蕉つふ入桑田守古中沙村在時その言
に津あして一日松玉と三津北奇仙有り「まてり古句等れあみ
居たときりあるの記も失くすより後成屋をのけ水バ沙才の初と厚
め「妙なり集く集く」出流ありそ「いふ系は水バ沙才の初と厚
居成思ふの志海よりてえ孫の比道は蕉つ蕉つ蕉つと稱
ら沙才後にもそ追慕他ふ異なり孫の知法をわりの
こあきて「大系め小意せ」梅の意はけり金津川へ「あつ
竹北村あや席の紅葉く清く一面をあらはしく梅は桑桑く桑
或「鳴千をれたあは」お勝んその超り「つむり」殺く拾ふ

蓋面黑

豎一尺四分

日月臨



粟穗及葉黃

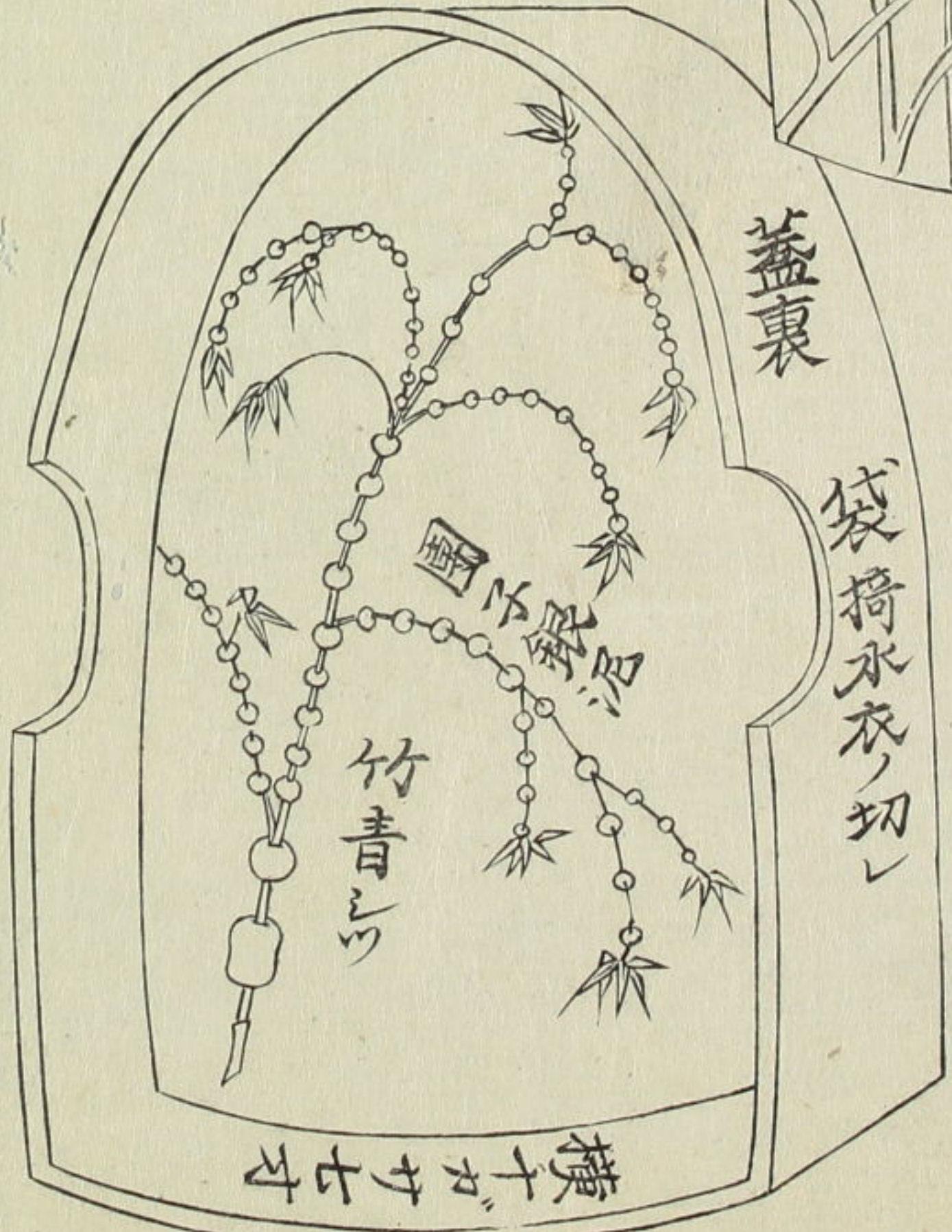
三月月
銀泥

頭陀箱付

貞享年間意翁蹈
山之途道過
郡山而止於宇衣家十

蓋裏

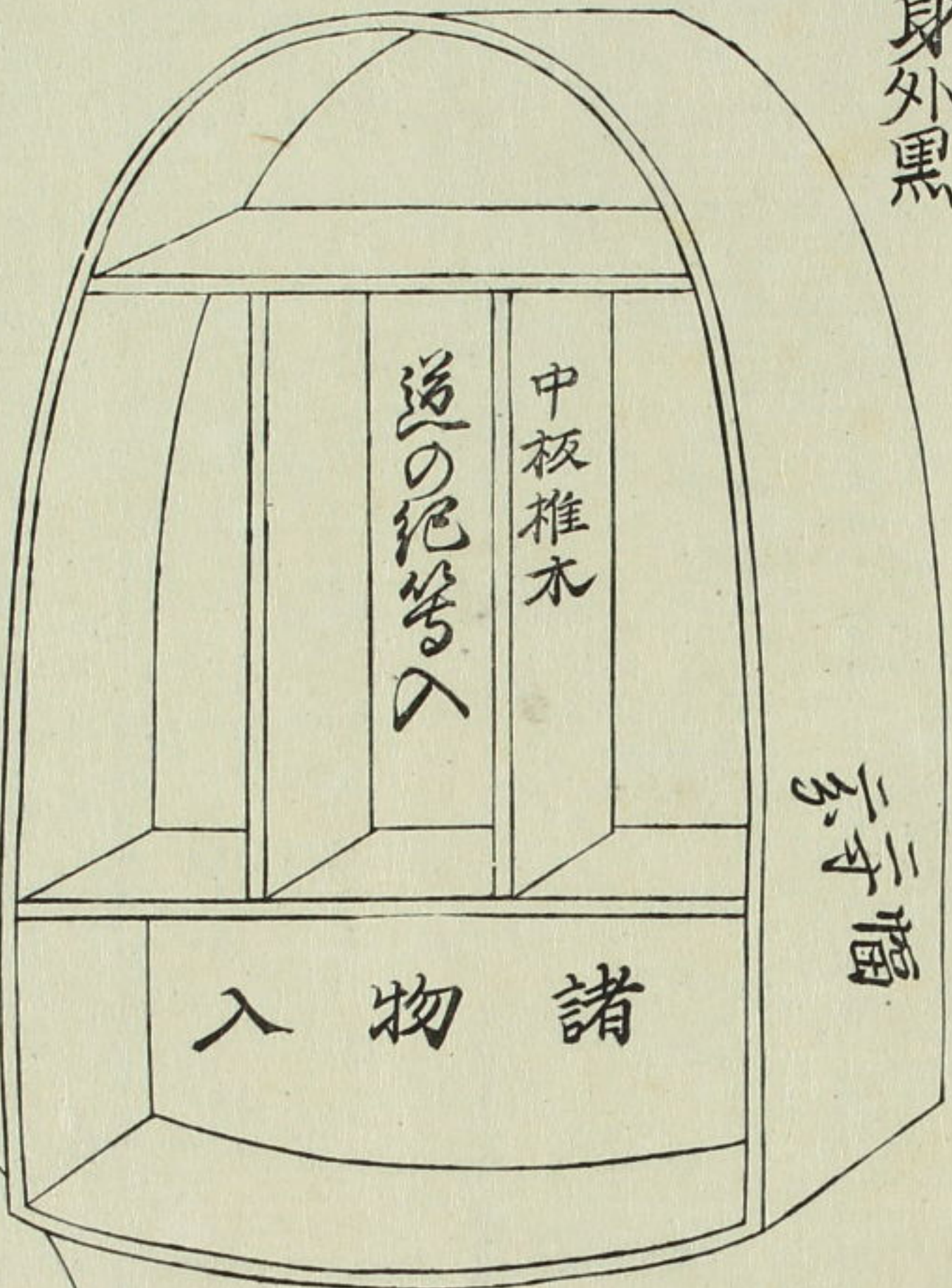
袋椅水衣切



件日与弟子松國有云
依之能得于時
翁賤別錄此一物
右深秘石室云

身外黑

日月臨



入物諸

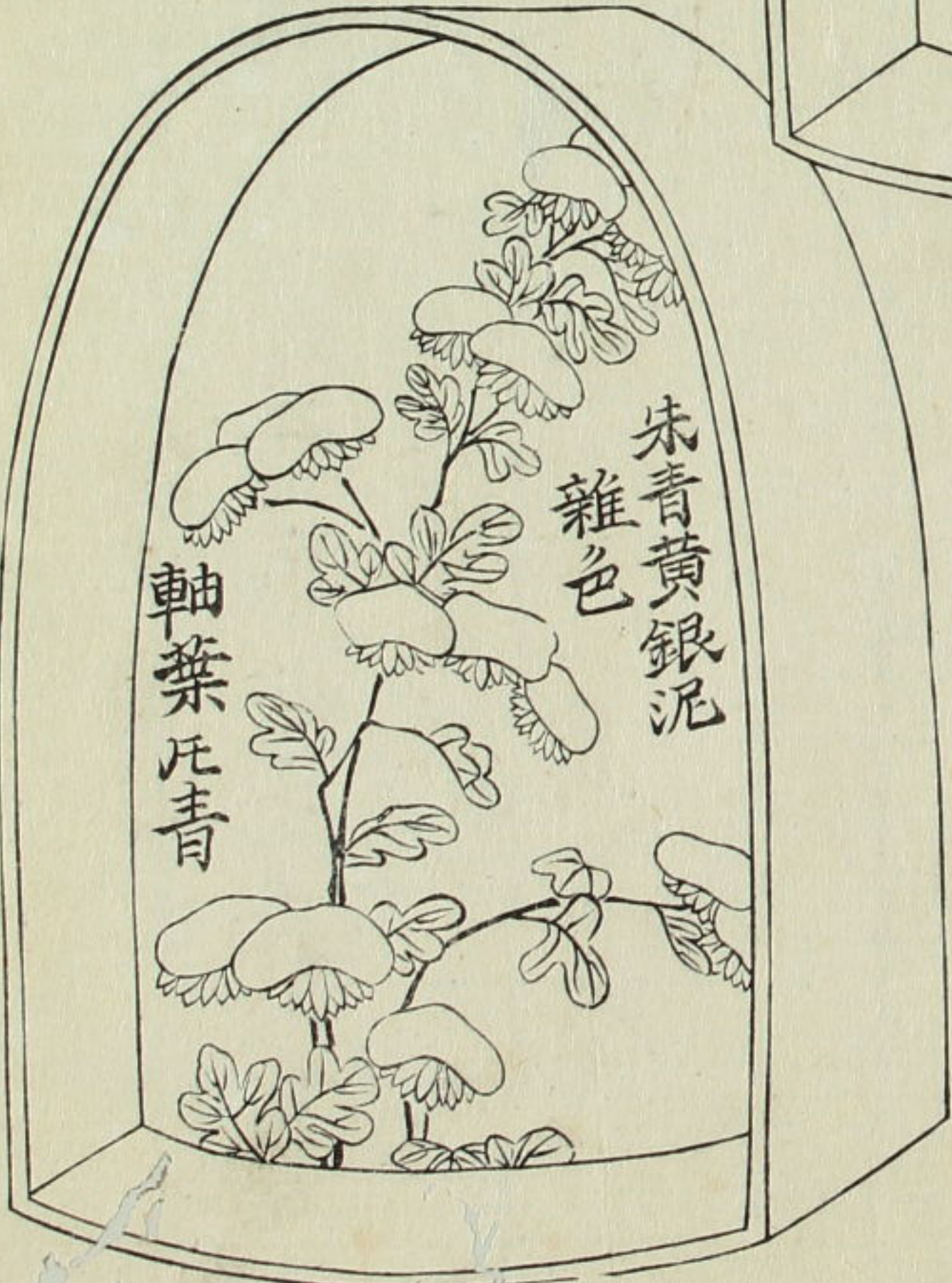
後有故遂為

正正廣士有僕嘗行
而得摸之跡
火止之兵是為附屬

惟恐若天

焉今依其家紀以識
傳來之正

儀伴采人



朱青黃銀泥
雜色

軸葉凡青

落禁くお生玉情おのひけさるゝ或年おらる「身ふくも機
は久目のを仏うふ又或時清少納言といふお出居けまけん昔
ちんくおおへとお出して「虫千や機北をとお母の年或出く
おのハ一句う五花をとお海まきく「茶くの茶花又ぬむも海
神傳伝の三教成とおれく「骨北破又海の芽香く海井く又回
又の什夥くお申お機北実山の木おるや身おるお「茶の
雲をろくて思く「簾の障四季北茶月おるく「茶つ池北きし
「梅おみろ老松おを神の面くお造作お中おるるる大松おの
類おる

生駒弟子

生駒弟子と加則金持のまうく家世くおるお孫おとなう
若く此君唐と号に「岩ふんで一目くお機お「吾孫よ三月月

おる機おお元孫の法はトめてお孫お面く「お回くおハ
法をうつ人充滿く道の融通又足ぬ屋く我今ありお
おれおとちりて普くお機成守護す人く「盟約せりと
おのり後年お再びお孫の砌り金持く「お茶れく「此
更後くお里を遠けるを久屋お獨里得馬お茶河てを
お我慕いお仕く「追附く「るの機く「てお衣お三月金三
おらくおすおおと志お厚おを感おせらお持るに金三
お我意の機おり三神く「申されお又北校秋く「お急
おを救い或く風お此まとおあつく加陽く「強人我遊く「む
おお蓮二村も此人お友く「おあまとお子お狂く「お記をり
おり「弟子我意つ十哲おかく「く「おを支件おは惜る
おばり「おるるく「お大いおる「僕おるるおお又澄お孫の

なり一子素崇ありと載あり

知足一家

知足と歩州崎海北人慈母と交り海一に居我叔照席
恒康亭と号す一志遠く風流あり或る姓の二男三男これ
くみ仕ある後居小中より句云路云河果報くく一志
家居く又くく風や吹袖吹く素心一知足の子父此志我
徳く千を掛き素心一徳く一夜く一夜く一徳く一徳く一徳く
根小多代我河居く時素く知足母「里かよひいこうあや就
月端母妻」云素く一徳く一徳く一徳く一徳く一徳く一徳く
一徳く一徳く一徳く一徳く一徳く一徳く一徳く一徳く一徳く一徳く

山口素崇

山口氏と江戸の人素小和漢此出を嗜く徳文を吾に老母
はく玉孝あり人ありひと妻を近く我すくむるを固禱

一て屋みぬ是秋のふ小遠んる我忍れなり等客の君子
軟福すく一弱冠あり素吟書つと遊ぐ能道此達者と
ける唐此名を今日といひ又素崇と素崇といふもの
別号あり後と或主家裁辞してあり海川の別荘く達
池成堀里交友を集く晋此惠を達社に擬せりあり能
あり素ら社中と稱するは是此等又依てな里句ら素社
頌すは句「池小精赤」飯名く能習ふ柳りなま作み素言
素種「年」もちや軍ちぐれつは後河「旨」す能ぬふや月
十三夜「孫」を樹こははと素や鈴鼓舞人く小能舞せ
目には素禁山ほとくぎに初は月同豪快あり可見享保二
年八月七十五歳く一て致せり或人慈母は能道此とい
んと家小唯死きりと答られ一とちありは素は能と此能

交際おめり多し古人の風阿まういこなつり一統るに今時
人招り断金銭とあつて夕ふハ冠髻れ如く異域を陪る
接代扱する者百と有ハ嘆息するに餘阿り

伊家奇人談巻之四終

